

## 協同性の育ちと保育者の援助 - 深い学びの実現に向けて -

著者	伊藤 孝子
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	230-239
発行年	2018-03-20
URL	<a href="http://doi.org/10.32125/00000021">http://doi.org/10.32125/00000021</a>

## 協同性の育ちと保育者の援助 －深い学びの実現に向けて－

伊藤 孝子

キーワード：幼児理解の理論・方法、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

### 1 はじめに

幼児教育と出会い、10数年が経つ。出会った頃は保育が見えず、幼児の遊ぶ姿から、何を学んでいるのかわからなかった。環境を通して行う教育と聞いて、環境は保育の生命線であることを知った。

教科書をもたない幼児教育は、園によって様々な保育が展開されている。しかし、そのねらいは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示されており、その実現に向けた保育が展開されなければならない。本稿では、来年度から施行される幼稚園教育要領に示されたねらいに基づき、幼児期の協同性の育ちについて述べたい。

### 2 幼児教育で育成したい力

平成29年3月31日、新しい学習指導要領が告示された。今回の改定では、「育成を目指す資質・能力」と「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の2本の柱で、幼児教育から高校教育までをつなぐなど、幼児教育の重要性が一層明確に示された。

新しい学習指導要領では、知・徳・体にわたる「生きる力」を幼児たちに育むために、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理し、育成を目指す資質・能力の三つの柱として、幼児教育から高校教育までを貫いている。

新しい幼稚園教育要領<sup>ii</sup>には、育成を目指す資質・能力の三つの柱として。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」を一体的に育成することが求められている。

---

<sup>i</sup>平成29年3月 文部科学省

<sup>ii</sup>平成29年3月 文部科学省

また、今回の改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示された。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものであると記されており、5歳児後半の幼児の目指すべき姿として捉えることができる。そして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の文末は、「○○できる」ではなく、「○○するようになる」と示されており、幼児が発達していく方向性を示したものとなっている。このことから「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園修了時に突然現れる姿ではなく、3歳児、4歳児の時期から、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことによって育まれるものであること、幼児教育の方向性を示したものであることを意識して保育することが大切である<sup>iii</sup>。

<幼児期の終わりまでに育ってほしい姿>

(1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

<sup>iii</sup> 初等教育資料 2017.8 解説「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」文部科学省初等中等教育局幼児教育課

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちょうろくするようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

そこで、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と5領域との関連を考えながら、各年齢における幼児の育ちについて、協同性の視点から明らかにしたい。

### 3 協同性を育む

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(3)協同性は、5領域の中の人とのかかわりに関する領域「人間関係」に示されている。幼稚園修了時に「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」ためには、3歳児から保育者や友達とかかわりを大事にして保育することが大切である。

幼稚園教育要領では、領域「人間関係」のねらいの一つに、「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」とあり、各年齢に応じた人とかかわる心地よさを、幼児にため込ませたい。

**事例1** 3歳児 お正月遊びを保育者や友達と一緒にしよう

3学期が始まると、室内では幼児が、お正月ならではのカルタ遊びやこま回しなどで遊んでいる。保育室には、パズル、絵合わせカード、カルタ、福笑い、こま回し(こま作り)などで遊べる場があって、A児とB児は、隣同士に座ってパズルをして遊んでいた。一人一人がそれぞれのパズルを持っていて、一緒に一つのパズルをするわけではない。A児は、自分のしていたパズルが終わると、B児がパズルを終わるのを待っていて、B児が遊び終わると、「次何する?」とB児に話しかけた。そして、2人で別の絵合わせカードを取りに行き、隣同士に座って個々の絵合わせカードを始めた。A児は絵を上に向けて、絵あわせをして楽しんでいて、B児は絵を裏側に向けて、神経衰弱をして遊んでいた。A児は絵あわせがカードでの遊びを終えると、次はこま作りコーナーへ行って遊び始めた。その5分後、B児も神経衰弱を終えて、こま作りコーナーへ行き、A児の隣に並んでこま作りを始めた。

こま作りコーナーでは、三角や四角、円に切った厚紙、カラーペン、カラフルなテープ、テープカッターが工作台の上に用意されている。テープカッターは2台、背を向けて机に並べ固定されていた。3歳児では、テープカッターをうまく使えず、テープをきれいに切ることができない幼児もいる。テープを使うとき、友達の作品に興味を持たせたい、友達と一緒に製作する喜びを味わわせたいと保育者が考え、工作台の片側にテープカッターを並べて置いた。

C児は、三角の厚紙に丁寧に色を塗り、カラフルなテープを順に貼り付けていた。保育者が「回してみて」と言うと、C児は自分がつくったこまを回し、保育者が「うわー、きれい!」「キラキラやね」と言うと、何度も回して、その度にうれしく満足そうな笑顔をしている。次は、四角の厚紙で次のこまを作り、保育者のそばに行って回していた。

D児は、C児の横で、C児が作っているこまを時々見ながら、同じようにカラフルなテープを厚紙に貼って、こま作りに集中していた。

3歳頃になると、食事、排泄、衣類の脱着など、基本的な生活習慣がある程度自立する。それに伴い、幼児の心の中には、「何でも自分でできる」という意識が育ち、一人でできることが増え、やってみようとする意欲が育ってくる。

そのため、3歳児では、幼児が「やってみたい」「一人でできた」と思える環境作りが大切である。事例1では、その環境を作るために、保育者は、一人一人に絵あわせカードを準備したり、テープカッターを2台固定して、友達を作る姿がよく見えるように配置したりして、友達とかかわれるように環境が構成されていた。



A 児と B 児は、同じカードと一緒に遊んでいなくても同じ場で遊ぶことで、気の合う友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じている。また、C 児は、保育者に認められ、褒められる心地よさを感じ、何度もこま作りに挑戦する楽しさを味わうことができている。幼児が安心できる保育者のかかわりが、保育者への信頼感や、人とかかわる心地よさを生み、幼児の中にため込まれていく。

このように、3歳児は、隣同士で同じことをしているだけでも一緒に遊んでいるという感覚を持っていると考える。幼児一人ひとりが安心して遊べる環境、一人ひとりに道具があり、じっくりとものに向かうことのできる環境が大切であることを痛感した保育であった。

3歳児では、幼児が安心して遊べる場と、保育者をよりどころにして友達とかかわれる環境づくりに留意したい。

#### 事例2 4歳児 体を動かしてあそぼう

秋の運動会が終わり、園庭では、年長さんにあこがれてリレーごっこをしたり、音楽に合わせて踊ったり、ドッジボールをして遊ぶ4歳児の姿が見られる。E 児は、円の外に出ずに、そのままドッジボールを続けようとしている。F 児が、「E ちゃん、あたったで」と言うと、E 児は泣いて、園庭の隅に行ってしまった。

E 児は、普段から負けることが受け入れられず、周りの幼児も E 児のことを「またや」というように感じている。保育者は、F 児たちに「E ちゃん見てくるね」と言って、E 児の後を追って、E 児の興奮が少し収まるのを待った。

保育者「E ちゃん、足痛かった？」

E 児「うん」

保育者「ボールが当たったのいややったん？」

E 児「うん」

保育者「まるの外に行くのがいややったんやね。そしたら、ドッジボールはやめる？」

E 児「・・・」

保育者「E ちゃんが泣いていたから、F ちゃんたち、心配していたよ」

E 児「・・・。ごめんって言う」

保育者「先生も E ちゃんと一緒に言ったげるね」

E 児は、「うん」と言って、笑顔になり、ドッジボール遊びに戻っていった。

E 児が F 児たちに「ごめん」を言うと、F 児たちは、「もう逃げんといてな」「当たったら、まるの外に行くんやで」「まるの外に行っても、あてたらいいやん」などと E 児に伝え、E 児もまるの外からドッジボールを続けることができた。

3歳の終わりごろから4歳にかけて、友達とのかかわりも増え、時には遊具の取り合いなどからけんかになることがある。保育者としては、「みんなと仲良くしてほしい。けんかはしてほしい

くない」と思うが、幼児期は、けんかやいざこざを通して社会性を学ぶ大事な時期である。

幼児は、自己主張をぶつけ合い、悔しい思いも経験しながら相手の主張を受け入れたり、自分の主張を受け入れてもらったりする経験を積み重ね、社会性を身に付けていく。

事例2では、保育者は、E 児の悔しい思いに寄り添いながら、F 児たちの思いもE 児に知ってほしい思い、E 児にF 児たちの思いを伝えた。

保育者は、けんかやいざこざが起こったとき、「ごめんね」「いいよ」で簡単にその場を収束させるのではなく、状況をとら



えながら、それぞれの幼児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるように仲立ちをしたり、納得して気持ちの立て直しができるように援助したりすることが大切である。

「ごめんね」の中に込められた幼児の思いと、簡単に「いいよ」で終わらせるのではなく、「いいよ」と言える幼児の心持ちを大事にしながら、領域「人間関係」のねらいの一つにある、「身近な人と親しみ、関わりを深め、・・・一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感」を幼児に育てたい。

### 事例3 5歳児 友達と一緒に秋の自然で遊ぼう

秋、5歳児の数人が、自分たちで作った「どんぐり転がし」にお客さんを呼んで、遊んでもらうことになった。

他のコーナーでは、アクセサリー屋さん、ケーキ屋さん、たこ役屋さん、ポップコーン屋さんなど、幼児が思い思いの遊びをしていた。

「どんぐり転がし」のコーナーでは、ラップの芯やカップ、釘で打った板を組合せ、複雑なコースが出来上がっている。その「どんぐり転がし」のコースをみただけで、幼児が試行錯誤しながら遊び込んでいることがわかった。幼児が、何度もどんぐりを転がして、うまく転がるか確かめながらコースを作り上げていった過程が目に見えてくる。

しかしながら、一緒に遊んでいる幼児の思いは様々で、自分の作ったコースにどんぐりを転がしては、その転がり方を確かめていて、個々のアイデアを共有するまでには至っていなかった。

そこへ、お客さんとして、3歳児が来た。3歳児は、ゲームの内容がわからなかったのか、5歳児に言われるがままどんぐりを転がしていた。その様子を見ていた5歳児担任の保育者は、5歳児を呼んで、「ゲームをする3歳児さんは、どんな顔してやある?」と、幼児に伝えた。その投げかけによって、「どんぐり転がし」をしていた数人は、「お客さんが楽しんでくれる



『どんぐり転がし』にするには、どうしたらよいか」という、共通の目的が生まれた。

まず、お店は閉店にして、話し合いが始まった。お客さんに「どんぐり転がし」を楽しんでもらうためには、どこから転がすか、点数を何点にするかなど遊ぶルールが必要なこと、チケットを作ってお客さんに渡してはどうかということ、だれがお客さんの呼び込みをして、だれがゲームの説明をするかなどの役割分担が必要なことなど、幼児は協力しながら、共通の目的をもって遊び始めた。

5歳児では、周りの幼児の遊びが見える環境を大切にしたい。周りの幼児の遊びが見えることで、幼児と幼児がかかわり合い、交流する姿が見られる。そして、保育者は、友達とのかかわりを考えて、幼児が遊び込めるよう環境を再構成することが重要である。

保育者は、5歳児の姿として、領域「人間関係」のねらいの一つ「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」保育を目指したい。3歳児で保育者や友達と一緒に過ごす楽しさや喜びを知った幼児は、気の合う友達と一緒に活動するようになる。そして、様々な友達とかかわる中で、同じ思いを共有したり、自分の思いが通らないもどかしさを感じたりしながら、人とかかわる力を育んでいく。保育者が、その時々幼児に丁寧にかかわることで、5歳児後半には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示された(3)協同性「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」姿が育っていくと考える。

#### 4 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

「幼児教育は、アクティブ・ラーニングそのものである」という言葉を耳にする。確かに、幼児の自発的な活動としての遊びを通して総合的に指導する幼児教育は、主体的であり、対話的な学びである。しかし、5歳児後半の遊びでは、「深い学び」が実現できているかについて、幼児たちの遊ぶ姿から見直すことが必要ではないだろうか。

幼児は、5歳児になると、遊びを中心とした生活の中で、様々な対象(人・もの・こと)とのかかわりを通して学んでいく。保育者は、幼児が興味をもって集中して遊びに浸れるように、幼児と一緒に遊んだり、教材を作ったり、遊びの計画を話し合ったりして環境を工夫している。

平成28年8月に中央教育審議会から出された、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、幼児教育における深い学びとして、「直接的・具体的な体験の中で、



『見方・考え方』を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤



誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える『深い学び』が実現できているか」と記されている。5歳児後半の幼児の姿として、「幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える」ことができる保育を創造していくことが求められている。

そして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示された(6) 思考力の芽生え「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。」姿を目指して保育することが、深い学びにつながると考える。

事例3の保育では、深い学びの実現には、幼児が実現したい思いに沿った適切な援助が必要であることを学んだ保育であった。

#### 事例4 4・5歳児 自然の中で遊ぼう

秋、4・5歳児が、幼稚園の近くの里山で遊ぶ保育を計画した。

里山には、松ぼっくりを使っての的当てや木々にロープを張ったブランコなど、幼児が興味をもちそうな自然を利用した遊び場を、保育者が工夫して作っていた。

里山に到着した幼児たちは、最初、的当てやブランコをして遊んでいた。しかしながら、時間が経つにつれて、保育者が用意した環境で遊ぶ幼児はいなくなり、自然と豊かに関わりながら遊ぶ幼児の姿があった。

忍者になって倒木を渡ったり、高い場所からジャンプをしたり、お猿さんになって「キャッキヤツ」と言いながら木に登ったりするなど、幼児はごっこ遊びをしながら自然の中で思い切り体を動かす楽しさを味わっていた。

ごっこ遊びをしながら自ら挑戦する幼児の姿から、幼児にとって自然そのものが魅力ある環境であることがわかる。幼児は、自然の中で様々な挑戦を繰り返し、「できた」という自信をため込んでいく。

鳴門教育大学大学院教授の木下光二氏は、「幼児期を幼児期として」<sup>iv</sup>(じほう論説)の中で、「環境は幼児教育の生命線であり、幼児の感覚や感性、身体全身での遊びや運動、柔軟な発想や科学的な思考、異年齢が交わる協同的な遊びなどを育む重要な役割を担っています。どんなに科学技術が進歩しても、自然に勝る教材(環境)はないのかも知れません。幼児期にふさわしい遊びと環境があるはずです。幼児期を幼児期らしく過ごすためにも、園庭の環境を見直し、魅力的な遊びが生まれることに期待します」と述べられている。

保育者は、幼児が遊び込めるように、遊びが続き深まるようにと、様々な環境を用意する。そして、環境の再構成では、新たな環境(もの)を「足す」ことが多くある。しかし、再構成をす

<sup>iv</sup>幼稚園じほう (全国国公立幼稚園長会)

るとき、今ある環境(もの)を「引く」ことができているだろうか。幼児にとって、至れり尽くせりの環境の中で、自ら学ぼうとする力、学びに向かう力が育つのか、環境の足し算と引き算ができているか、日々の保育を見つめ直すことの大切さを感じる。

100円均一ショップで様々な道具が買えるようになり、たくさんのものであふれた保育室を目にすることが増えた。3歳児の環境、4歳児の環境、5歳児の環境が保育のねらいに沿っているか、今一度保育室や園庭などの環境を見直す必要があるのではないだろうか。

## 5 終わりに

保育を参観させていただいて、心に残る一場面がある。

4歳児が、保育室で、ままごとをしていた。棚には、さまざまなケーキが並べられている。キッチンでは、包丁を使って野菜を切る幼児。細く切った野菜にキャベツの葉を巻いて、ごちそうを作る幼児。交わす言葉は、それほど多くはないが、それぞれの思いで真剣にごちそうを作っていた。そんな幼児たちの様子から、改めて、保育は、幼児の家庭での生活そのものだと感じた。

ちょうど料理ができあがり、数人で食べようと準備が整ったころ、片付けの時間になった。他の遊びをしていた幼児たちは、片付けを始めている。私は、テーブルの上に並んだ料理をどうするのかと、保育者と幼児たちの様子を見ていた。

周りでは、どんどん片付けが進んでいく。ままごとをしている幼児たちは、担任の保育者と一緒にテーブルを囲み、ごちそうをおいしそうに食べ始めた。そして、ごちそうを食べ終わり、みんなで「ごちそうさま」をした後、ようやく片付けが始まった。手際よく後片付けをする幼児たちの笑顔から、遊びを終えた満足感が伝わる保育であった。

東京大学大学院教授の秋田喜代美氏は、著書『保育の温もり』の中で「心ゆくままにある物にこだわり、自分なりにしまいをつけると、すっきりと次の新たな世界へ移ることができます。しかし、思いやこだわりが満たされていなかったり、追い立てられてしまったりするときには、満足感も切り替える気持ちも生まれません。みずから始めみずからけじめをつける経験は、生活者としての幼児を育てる大事な時間です。ひとりひとり、その流れの長さは違います。しかし、時間割ではない保育の場だからこそ、保障したい経験なのです。」と記されている。

年齢が上がるにつれて、時間で動くことができる幼児に育てていくことは大切である。しかし、幼児教育は、時間割にとらわれない教育であるからこそ、こま切れでない保育、幼児の時間間隔をとらえた保育を大事にし、幼児が次への活動へ向かう力を高めたいものである。

幼児教育の重要性が指摘されて久しい。しかしながら、幼稚園・保育所・認定こども園では、日々の行事に追われ、ゆつくりと保育をしている時間が少ないと聞く。家庭でも、習い事や保護者の就労等から、時間に追われる幼児も多い。自然の中で思い切り遊ぶ場も機会も減り、失われた幼児期の豊かな遊びを、園では経験させたいと思う。

---

v 『保育の温もり～続保育の心もち～』 2014.8 ひかりのくに

保育者は、幼児一人一人の発達を捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して、豊かな保育を実現したい。

彦根市立金城小学校・教頭